

御^オ
蚕^シ
様^ラ
マ

(昭和篇)

Ver.3.0

登場人物 (仮名……詳細、続柄は次ページ以下の参列者、家系図を参照のこと)

氷室正平

氷室比奈子

氷室深雪

金満寛至

御嶽千種

永邑瑞穂

氷室暁悦

氷室雪代

氷室本家第貳拾參代当主 氷室源一郎葬儀告別式 参列者一覧

氷室正平ひむろしょうへい（喪主 源一郎長男 貳拾四代当主）

氷室日向子ひむろひなこ（正平妻女……旧姓・桑畑）

氷室深雪ひむろみゆき（源一郎次女……神経病の為欠席？）

金満寛至かねみつかんじ（源一郎長女・小雪の夫……事業の為欠席）

御嶽千種みたけちくさ（源一郎庶子）

永邑瑞穂ながむらみずほ（世話人）

既に他界した人々

氷室暁悦あきのぶ（二十二代当主・正平祖父……昭和四年没）

氷室雪乃ゆきのの（暁悦正妻……明治三十五年没）

氷室雪代ゆきよ（暁悦長女……大正八年没）

氷室源一郎げんいちろう（貳拾參代当主 婿養子 旧姓・舛尾……昭和七年没）

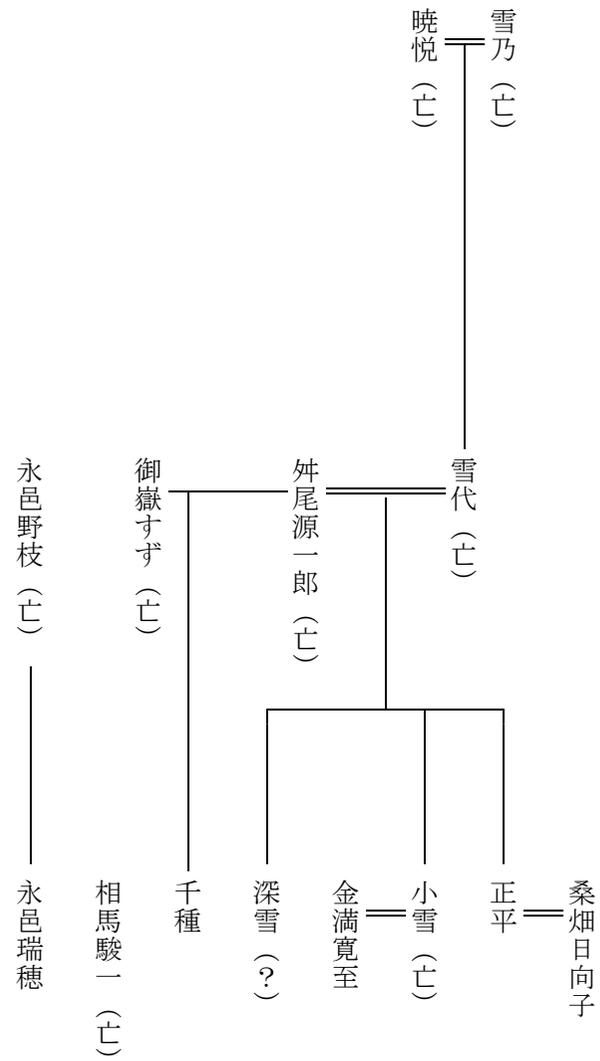
金満小雪こゆき（旧姓氷室・源一郎長女・金満寛至亡妻……大正七年没）

永邑野枝のえ（瑞穂生母……明治四十二年没）

御嶽すずみたけすず（元氷室家女中・千種生母……明治四十年没）

相馬駿一そうましゆんいち（氷室家馬小作……大正十年戦没）

氷室家系図 (二重線は正式な婚姻)



序

シラアノさいもん
蚕祭文

観客が入場すると、そこは葬儀の席である。黒白の垂れ幕が、緞帳のように舞台と客席を隔てている。そして、そこに漂っているのは、冷氣だ……香の煙、では無く、凍てつくような、冷氣……そして、聞こえているのも読経では無く、冷氣そのものの、音……その狭間に、微かには経文があるのかも知れない。不特定多数の雑多な宗派の読経が混じり、更にはイタコの口寄せやラテン語の祈禱までが重なって……

昭和七年……一月下旬……

雪深い、何処かの山国にある、村……その村の庄屋職を十数代に渡って務め続けた名家、氷室本家。その二十三代目の当主、氷室源一郎の葬儀が行われている。

遺族達は、入場する観客に対して、弔問客に対するように首を垂れるだろうか、それとも、背を向けて、混合した呪文のような詠唱に、聞き入っているだろうか……？

喪主である長男・正平の左右に、妻の日向子と昨夜到着したばかりの源一郎庶子、御嶽千種。少し離れて世話人の永邑瑞穂……咳きを堪えた瘵癩が、かえって体調の悪さを窺わせる正平。時折目頭を押さえたりしている日向子。千種は微動だにせず、俯き気味座っている。そして、無表情に控えている瑞穂……

と、客席が落ち着くと、遺族達は改めて向き直り、首を垂れる。
と、瑞穂、一礼して……

瑞穂

今日は、御多用中を氷室本家……第二十三代当主、氷室源一郎の葬儀告別式に御参列頂きまして……誠に、ありがとうございます御座いました。遺族を代表して、喪主、氷室正平より、皆様に御挨拶が御座います。

と、正平、時折咳を交えながら……

正平

……本日は、お寒い中、父の葬儀に御参列頂き……誠に……誠にありがとうございます御座いました。こうして皆様にお集り頂きました事を、父も……さぞ、喜んでいらっしゃる事と……存じます。ええ、父は……父は、皆様も御存知の事と存じますが……舛尾家より、母、氷室雪代の入り婿として当家に入り、氷室家二十三代となりました。我々、子供らにも云えぬ気苦労も多かったと思います、父は……父は……

瑞穂

……

と、すすり泣きながら涙を拭っていた日向子、絶句した夫に気付く。

日向子

……あなた？

正平

……ええ、父は……ええ、大正七年に私どもの妹、小雪、続く八年には母、雪代が他界いたしました、また……

瑞穂

……大丈夫ですか、あなた？

正平

うるさい！

日向子

……

千種

……

正平

ええっ……ええ、父は、妻と娘に先立たれた訳で御座いますが……これで……

と、正平、大きく咳き上げて先が続けられない。日向子、夫と会葬者達を交互に見ながら取り乱している。

日向子

あなた……あなた、しっかりと下さい。あなた……

瑞穂

……

と、日向子、救いを求めるように瑞穂を見る。瑞穂、振り向きもせずに、ただ、じつと……

と、無表情に手をついていた千種が……整然と……

千種

本日は御会葬ありがとうございます。最後では御座いますが、父亡き後も、私ども遺族に、かわらぬ御厚情を賜りますようお願いいたします。本日は、誠にありがとうございます御座いました。

と、千種、整然と礼。

瑞穂

……これを持ちまして、氷室本家第二十三代当主、故、氷室源一郎の葬儀告別式を終了いたします。長時間に渡り、誠にありがとうございます御座いました。

と、千種と瑞穂、深々と礼。日向子、未だ息の荒い正平の身を支えながら忍び泣いている。活人画のような舞台の風景……

と、更に続く冷気と詠唱の中に混ざる押し殺したような忍び笑い……忍び泣くのではない、笑い声が聞こえ……客席と遺族にあてられていた明りが落ちて、黒白の垂れ幕の黒い部分が透き通って……

と、そこには、居る。忌み事には、あまりに場違いな、白を基調した振り袖を羽織った忍び笑いの主……その白い影の後姿……それは、高速度撮影されたフィルムのような速度で、小躍りしているように見え……低徊する白い影の手に、桑の木に彫られた娘と馬の姿に、オセンダクと呼ばれる布を幾重にも重ねた、家の神の依代……一対のオシラサマである。それは、次代の巫女として育てられた氷室家の次女、深雪のオシラホロギする姿なのであろうか。

と、無数の鈴が一斉に鳴り出したような冷気の響きの中で、忍び笑いを織り交ぜて唱えられる神降ろしの言の葉が、その口からこぼれ落ちるように流れて……

深雪

ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……フッフッフッフ……ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやこのたり……フッフッフッフ……あはりや、あそばすとまうさぬ、ひむろぎに、おしらのおおかみ、おりませませ……おしらのおおかみ、おりませませ！

と、対のオシラサマで人形遊びをするかのようにしながら、オシラサマの謂れ「蚕祭文」が詠まれて……

深雪

……昔、金満長者と申す者あり。長者に一人の娘ありて、玉や御前と名付く。娘、父の飼うまやいおく名馬を愛で、馬もまた娘に恋する也。馬、その名を梅檀栗毛と号す。娘、厩舎に行きて寝ね、ついに夫婦となる。父、これを憎みて、馬を桑の木に吊り下げ、皮を剥はぎて殺す。娘、夢にてこれを知り、馬にすがりて泣けば、馬、娘を乗せ、天に昇り、後に蚕を残して神となれりと云う……オシラサマとは、この時よりなりませる神なり……

と、深雪、その祭文の丁度終わりで背を向けた。その両肩は、また忍び笑いに小刻みに震え……

と、更に、幾重にも重なって行く、忍び笑いと布留部の誦文。それは、深雪の声だけではなく……

ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……ひふみよいむなやこのたり……ひふみよいむなやこのたり……フッフッフッフ……

と、白い影の小躍りも、やがて消えて……

溶暗。

と、神棚のような造りの、社殿か庵いおりのような『部屋』……氷室家の、元は離れであった棟の一室。舞台奥には、低い手摺てすりで隔てられた一段高い所があって、そこには注連縄で閉じられた小さな祠ほこりが一棟飾られている。かつて、村中の女達がオシラホロギ……オシラ遊ばせとも呼ばれる祭に集い、代々オシラサマを祀まつって来た氷室家の女が、巫女みこを務めた場所である。何年間も閉ざされていた筈はずだが、総木造の部屋は丹念たんねんに磨き上げられ、底冷えのする光を放っている。

と、僅わずかに差し込んでいる夕日の光の中に、他界した氷室家の長女、小雪の夫だった金満寛至が感慨深げたふさに佇たふさんでいる。と、寛至、ゆつくりと部屋の中を見渡し、深く息を吸い込み……吐く。背広のポケットを探り、葉巻を取り出す。その匂においを嗅かぐ。と、更にポケットを探る……燐寸りんじんを探しているようだが、無い。と、寛至、葉巻をしまうでなく、それを手にしたまま、また部屋を見渡している。

と、唯一の入り口である上手の扉より、日向子。些いささか憔悴しょうすいした表情が窺うかがわれる。と、部屋の中の人影に気付いて立ち止まる。

日向子 ……！ 誰だれ？

寛至 ……ああ……

日向子 ……あの……どちら様でしょうか？

寛至 ひなちゃんか……

日向子 はい？

寛至 判らんかね。

日向子 ……？

寛至 まあ、随分と久しいから……無理もないが……お義姉さん、と呼んだ方が良いのかな？

日向子 ……寛至、さん？

あんたは、死んだ女房の兄さんの嫁さんなんだから、まあ、お義姉さんと呼びゃあいいんだろうが、どうもな……

日向子 金満の寛至さん、ですか……？

寛至 ラジオは届きましたか？

日向子 ラジオ……？

寛至 ラジオですよ。寝たきりの正平には、楽しみも無いだろうと思って、こないだ送ったんだ

が……

日向子 ……はい、その節は……

寛至 あれは良い。何しろ家うちに居ながらにして、帝都の天気だの、ここより遙はるか亜米利加は紐ニュー育ヨクの相場だの、皇軍の戦果だのが手に取るように判る……正平には喜んで貰もらえると思ったんだすがね……

日向子 はい、あの……

寛至

あれが有れば『東京行進曲』も『君恋し』も聞けますよ。流れて来るのはニュースや天気予報ばかりじゃ無いんだ。昔恋しい銀座の柳……と、云えば、あんた知ってますか、日向子さん？

日向子

はっ？

寛至

震災で焼けた銀座の柳ね、あれ、朝日新聞が寄贈して、来月、植樹式をやるんだそうですよ。

日向子

……左様で御座いますか……

寛至

植えて嬉しい銀座の柳……とでも、唄われるのでしょうか……

日向子

……

寛至

ややつ、これは迂闊だった。

日向子

……？

寛至

朝日新聞がやる前に、あたしが思いつくべきだったなあ……そうすりゃあ新聞にあたしの名前がでかか……まあ、何はともあれ、見られる訳ですよ、銀座の柳が、また。

日向子

私……銀座の柳を見た事は御座いませぬから……

寛至

おや……ずっと前に、ほら……明治座の切符を二枚送ったと思いますが……そうですよ、

日向子

正平とあなたの御結婚の御祝いにですよ、奥さん。芸術座の……ほら、松井須磨子が『さすらいの唄』を唄ってたやつですよ。日本橋からなら銀座も近いのに……

日向子

あれは……お義母様……雪代様が深雪ちゃんを連れてお出かけになりましたわ……申し上げたではありませんか、貴方と小雪ちゃんの、その……御結婚の時に……

日向子

……ああ……そうでしたかね……

寛至

……

日向子

……

寛至

……

と、寛至、所在なさげに葉巻をポケットにしまう。

日向子

いつ、いらしたんです？

寛至

……今さっきね。ハイヤーを呼ぼうとしたんだが、こつちにはそんな物もありやせん……

日向子

ま、この冬は雪にならなかつたから良かったよなものの、……足が肉刺だらけになつちま

日向子

いらつしやれない、のではなかつたのですか……？

寛至

来るには及ばず、と云つたのは正平の方だ。あたしじゃあない。

日向子

……

寛至

……

日向子

……そうでしたね……

寛至

……

日向子

……

寛至

今度ね、満蒙に新しい国が出来るのですがね、奥さん。まあ、そつちの方で、色々、役に

日向子

に立て……と、お達しを受けとりましてね……内々にですが……

日向子

……それは……おめでとう御座います。

寛至

いえ……

日向子

……

寛至

……

で、まあ、あたしも色々忙しい身ではある訳ですよ。今年は年明け早々に、鮮人逆徒が畏れ多くも……畏れ多くも、今上陛下の行列に爆弾を投げるなんぞという事から始まりましたからね。陛下が御留意下されたから良かったよなもの、犬養さんの内閣が、そのまま総辞職なんて事になったら、あたしの仕事にも差し障りが出ますし……、あんただから、

特別に聞かせて差し上げるのだが……選挙という事になれば、あたしも色々と動かにやらならんという訳ですよ。ですから、そりゃあ、もうアレなんです……四月のダービーの事もありませんしね……

日向子　だあ、びい……？

寛至　いや、こっちの話です。

日向子　……

まあ、そういうアレを色々アレして出向こうとしていたんですがね。何しろ、正平は相変わらずなんですしよ。

日向子　いえ、そんな……

寛至　顔に疲れが出てるよ、奥さん。

日向子　……

看病疲れだなあ……あなた以外は病人ばかりだものな、この家は。まあ、その病人も、また一人減って、あなたも少しは楽になった訳だが……

日向子　何て……！

あたしだって知ってますよ。自分で女房を看取ったんだから、そりゃあね、どんなに大変かって事はね……小雪はあつと云う間に逝っちまいましたから、そんな事思う暇もありませんでしたけどね、十二年も経った今にして考えると、です。アレがもっと長々と続いていたら、あたしや思っただんじやないかって考えるんですよ……早く死んでくれ、つて……こいつが早く死んでくれたら楽になるのにつて……

日向子　……寛至さん、どうして……

あんたが……奥さんが、この家に嫁いでのからの、長い長い苦勞を想像するとすね、そういう事を、つい……ね。ひ、な、こ……

日向子　……

寛至　……

まつ、兎も角ともかくです、寝たつきり……

日向子　……

……寝たり起きたりの正平に代わって、挨拶あいさつの一つもしてやろうかってね、そう思っただけで都合をつけたのですがね。さっきも云ったとおり、あれやこれやとね、埋葬にも間に合

日向子　わなかつた訳だが……で？

日向子　……

寛至　……義姉さん。

日向子　！　はい？

寛至　それで、うまくやれましたか、御主人、は？

日向子　……ええ、それが……

寛至　……フツ、思った通りだ……

日向子　でも、千種ちゃんと先生が上手く収めてくれましたから……

寛至　千種？

日向子　あの、御当主の言いつけで、先生が探して下さっていた、その……

日向子　……ああ、入り婿のお義父さんが女中に手を着けて孕ませた……そうか。見つかったのか

ね……

日向子　死に目には会えなかったのですけれども……

寛至　……

日向子　先生が、良くやって下さいましたから……

寛至　先生って……？

日向子 瑞穂さん……あの瑞穂ちゃんです。ほら、深雪ちゃんと……一緒の日に生まれた、あの……

寛至 ……隠れ切支丹の永邑んとこの父無し子か……思い出したよ。それが先生だった？

日向子 今、村の小学校の先生なんですよ、瑞穂さん。

寛至 ……ふうん。それはまた……そうかい。つまりは、妾の子と父無し子に救われた、って事かね……恥の上塗りだな。

日向子 そんな云い方……

寛至 で、その深雪ですが……

日向子 ……

寛至 そうだったねえ……

日向子 一時、良くなったように見えたのですけれども、村から青島^{チンタウ}に出征する兵隊さんを見てから……

寛至 ……

日向子 遠い目をしましてね、不意に笑ったかと思うと、今度は……唄をね……「行こか 戻るか

北極光の下を 露西亞は北国 はてしらず」……って。

寛至 ……明治座の松井須磨子……？

日向子 想い出したのでしょうか、相馬の駿一さんの事を……

寛至 ……そうか、シベリアで口助に殺されたんだったな、駿一は……あれは良い馬小作だった。

日向子 馬の好きな娘でしたからね、深雪ちゃん……

寛至 生きていたら、あたしの馬の世話を……だが、口助やチャンコロに殺られるんざ、日本

日向子 男児の恥だ。やっぱり蝦夷の血の入った奴は……

寛至 そんな風に云わないで下さい。同級生なのですよ、私や小雪ちゃんの……それに……

日向子 あたしだって戦いましたよ、前の戦争では、青島で！ 守る為だよ、あんたを……あんた

寛至 達を、あんたの幸せを、だよ。

日向子 ……

寛至 そして生きて帰って来たよ。死ぬか生きるかの怪我をして、だよ。そしたら、あんたは、

日向子 正平の……

寛至 ……

日向子 ……

寛至 桑畑の家は……

日向子 あ!?

寛至 私の実家です。桑畑の家は、享保の飢饉からこっち、氷室の御蚕様の桑畑を預かって、

日向子 食いつないで……生き延びて来たんです。そんな家の跡取りに見初められて、望まれて……

寛至 私に何が選べると云うのですか、貴方？

日向子 ……

寛至 ……

日向子 と、寛至、気まずい沈黙の中、一旦しまった葉巻を取り出す。そしてまた、燐寸

寛至 を探つて……

日向子 それで……？

寛至 ……ん？

日向子 此処で何を……

寛至 日向子さん。

日向子 はい？

日向子 ……

寛至 あんた、火を持つとりやせんかな？

日向子 火つて？

寛至 台どこの燐寸で構わんのだが……

日向子 ……何を仰るのですか！

寛至 いやあ、つまり、これをね……（と、葉巻）

日向子 ……

寛至 ……どうも落としたようだなあ……

日向子 駄目ですよ。

寛至 ……ダメかね。

日向子 決まってるじゃありませんか！

寛至 ……ほう……

日向子 当たり前です。だつて此処は……

寛至 此処に……

日向子 えっ？

寛至 オシラ堂だよ。昔から、此処に入りたいたいと思つていた、ずっと……オシラホロギでもなけ

日向子 れば、氷室の者しか入れない場所だからなあ、此処は……

寛至 ……

日向子 そういう祭の時だつて、男は入れちゃあ貰えなかつたしねえ。

寛至 そりゃあ、そうですよ。

日向子 そうかい？

寛至 ええ、だつて……

日向子 ああいうね、祭の時にね、あんた達がこう、ゾロゾロと列を作つて、此処に入つて行くじ

寛至 やないか。オユキサマの後を付いてさ。みんな白いおつかぶりをしてさ……

日向子 ええ。

寛至 それでさ、聞こえて来るんだよ、オユキサマと一緒に、あんた達が唱える念仏みたいな、

日向子 あれがさ……ヒイフウミイヨオイツムウつて……

寛至 ……

日向子 それでさ、ますます見たくなくなるんだよ。何を拝んで、何をやってるんだらうつてさ……

寛至 貴方つて……

日向子 あっ？

寛至 ……貴方つて、何でも見たがる人でしたものね……

日向子 見たいよ。

寛至 ……

日向子 蔵に鍵のかかった葛籠があれば、開けてみたいさ。台どこの戸棚の中に餅や羊羹があるみ

寛至 たいにさ……人形の着物の下とか……

日向子 ……

寛至 未亡人の喪服の下、とかさ……見てみたいよ。

日向子 そうやって……

寛至 あっ？

日向子 開けたのでしたね……

寛至 何だね？

日向子 祠の扉です。あの、裏山のお稲荷さんの……

寛至 ……ああ……随分、昔の事を……

日向子 ……

寛至 粗末な焼き物で作つたお狐さんやなんか並んでいたな……子供心に、ひどくガツカリ

したのを覚えているよ……

日向子 逃げたじゃないですか。

寛至 そうかね？

……お狐きつねさんに睨にらまれてるみたいで……みんなして、大声をあげながら逃げたんですよ。翌日になって行ってみると、誰だれが閉めたんだか、ちゃんと祠ほくらは閉まっていました……

寛至 ……

日向子 ……

寛至 それで……

日向子 えっ？

寛至 またまた祠ほくらがある訳だ……

日向子 ……まさか？

と、寛至、祠ほくらに向かって、つかつかと段に登ろうとする。

と、慌あわてて寛至の前に立ち塞がる日向子。

日向子 いけません！

寛至 何で？

日向子 だって、ここから先は……

寛至 何だね？

日向子 オユキサマだけが上がれる所です。

寛至 もう良いだろう。

日向子 いけませんよ。

寛至 ……

日向子 やめて下さい……!!

寛至 オユキサマは当主の正妻が務めるのだから？

日向子 それは……

だからさ、あんたが、良い、と云いえば、良いんだよ、それで。そういうモンじゃないのかね？

日向子 ……駄目ですよ、私は……

寛至 ……

日向子 だって、私には資格が無いのですもの……

寛至 ……

日向子 私には、聞こえないのですもの……

寛至 ……『雪の声』、かい……

日向子 ……

寛至 だったら、どうしてオユキサマ……雪代さんは、正平とあんたの結婚を認めたのかね？

この村の主みたいなの二十二代目が、先代の爺じいさま様が反対していたのに、オシラサマの御託宣ごたくのたままでしてさ……

日向子 そんな事、私に……

寛至 なつちまえば良いんだ、あんたがオユキサマに。それから……

日向子 ……

寛至 ……

と、寛至、日向子を押し退けて壇上に登り……

日向子 ああつ！
寛至 見たかったんだよ、これが。氷室が金満から取り上げたオシラサマの素顔ってやつをさ…

日向子 やめて！ 天罰が…オシラサマの罰が当たりますわ！
寛至 そんなモン、当たる訳無いだろ。

日向子 だって…
寛至 あのお稲荷さんの祠ほこらはさ、あたしが開けたんだよ。憶えてるかね？

日向子 ……
寛至 正平はやめようと云ったよ。怖かったんだな…あの駿一も、小雪も、それからあんたも
日向子 だ。みんな罰が当たるのが怖いからやめようってさ。で…

日向子 ……
寛至 あたしが開けたんだ。あたしに罰が当たったかね？
日向子 だって、小雪さんが…

寛至 あたしはまだ生きています。

日向子 ……
寛至 正平はあのザマだ。駿一も小雪も死んで、おかげであんたは…あたしはさ、青島の戦いでも、スペイン風邪でも、震災でも死なずにこうしてぴんぴんしているよ。だからさ、天罰だの祟りだのってモンは…

と、入り口に瑞穂と千種が立っていて…

瑞穂 祟りますよ。

寛至 ん!?

瑞穂 ですから、祟りはありますよ、金満さん。

寛至 ……
日向子 先生…

瑞穂 祟りはね、それを恐ろしいと思う人には祟るんです。それが怖いから当たりますよ、罰が。

寛至 ……ほう…
瑞穂 それに、今はまだ物忌みの間です。初七日…いいえ、七七日なななぬかの法要が終わるまでは、神様も居心地が悪くて閉じこもっていたいでしようし。

寛至 七七日？ 四十九日が済むまで、開けちゃあいかなのかね？
瑞穂 この氷室ではそうなんです。ねっ、日向子さん。

日向子 えっ…はい。
寛至 そんな時まで待って居られる訳が無いだろう。あたしや忙しいんだよ。

瑞穂 待っていたって、見られる訳じゃないですよ、金満さん。

寛至 おい、あんた…
瑞穂 日向子さん。

日向子 はい？
瑞穂 二十四代目が呼んでおられます。

日向子 主人が？
瑞穂 はい。

寛至 ……
日向子 ……
寛至 ……まつ、行ってらっしゃい。新御当主正平様のお呼びとあらばね…

日向子 ……はい、それじゃあ……
寛至 どうせ、じきに終わる事だよ。そうやって呼びつけられるのさ。
日向子 ! ……
千種 ……
寛至 ……
瑞穂 お待ちですよ、日向子さん。
日向子 はい……千種さん。
千種 はい。
日向子 こちらはね……
日向子、後は……お待たせすると、また……
日向子 ……
寛至 ……ふうん……
日向子 ……じゃあ、後をお願いします、先生。
瑞穂 はい。

と、日向子、肩を落としながら出て行く。瑞穂は黙礼して送り、千種は無表情に……そして、寛至は背を向けている。

三

奉安殿

と、あからさまに大きな足音を立てて壇上から降りる寛至。
と、瑞穂が背中から……

瑞穂 金満さん、御挨拶が遅れましたけれど……
寛至 フン、永邑んとこの娘だろう。
瑞穂 はい、瑞穂です。
寛至 おっ母さんの名前は確か、ヤエだかタエだかと云ったかな？
瑞穂 野枝です。
寛至 そうそう、それぞれ、野枝さんだった。で、お父つつあんは……ああ、居らんだったなあ。すまんすまん。
瑞穂 いえ。
千種 ……
寛至 で、小学校の先生をしとるそうじゃないか。
瑞穂 はい。
寛至 ほう……すると、アレは届いとるのかなあ？ 年明け早々に送った筈なんだが……
瑞穂 はい？
寛至 そら、そのアレだよ。ああ……祠ア……？ みたいなモンだがね。
瑞穂 はい？
寛至 だから……つまりその、ナンだ。御真影をな……畏れ多くも、天皇陛下の御写真をだな、校長室じゃなく……そういうアレに収めて、校門に入ってすぐとか、校舎の入り口とかに建立奉ればだ、アレだろう……毎朝、毎日、行きと帰りに、全職員、全校生徒が御挨拶出来るというありがたいナニだ。まあ、部下に任せとったから、正しくは何と云うのかは知らんが

瑞穂 …… ああ、そうなんですか。

寛至 何だ？

瑞穂 はい？

寛至 だから何なのだ、そうなんですか、とは？

瑞穂 はい……

寛至 ひよっとすると、アレか？ あんた達は恐れ多くも！

瑞穂 ……

千種 …… 恐れ多くも、御真影に頭を下げてはおらんのか？ ひよっとして、建立奉ってはおらん

寛至 ではあるまいな!!

瑞穂 ええ、その……はい……

寛至 非国民め!!

瑞穂 ……はい。

寛至 何故だ！ 何故建立奉らないのだ!! 何故毎朝毎日、行きと帰りに御挨拶いたさないのだ

!! 母校の事を思えばこそあたしはだ……

瑞穂 そう仰っても、学校は休みですわ、まだ。

寛至 ……

瑞穂 ……

寛至 ……ん？

瑞穂 ですから、冬休みですよ。都会と違って、ここは雪国ですからね……冬休みが長いんです。

寛至 お忘れになりましたか？

瑞穂 ……ああ、いや、その……ナンだな、帝都に居ると、帝都の暦で物事を考えてしまうから

な……うむ。それに、アレだ、ラジオもこの村の天気予報を流したりはせんし……まあ、そ

ういう事もある物だよ。うむ、うむ……うむ。

千種 プツ……

寛至 ん？

瑞穂 金満さん、この娘が……

寛至 聞いているよ。二十三代目の……源一郎さんの落とし胤だな。

瑞穂 ええ……源一郎さんの娘さんです、三人目の。

寛至 フム、そうかね。ふうん、君がねえ……

と、寛至、千種の周りを回りながら、娼婦を値踏みするように見る。

千種です。

ああ。

瑞穂 こちらは金満寛至さん。亡くなった小雪さんの旦那様ね。

千種 そうですか。

昔はこの村に住んでいらしたのだけれども、戦争から復員してから、東京でお仕事をしていらつしやるわ。

千種 そうですか。

寛至 うむ、軍や政府の御用を承っておつてな、何かと忙しいのだ。

千種 そうですか。

寛至 ……何だ？

千種 何ですか？

瑞穂　　そうですか……分かりました。
寛至　　……

と、寛至、何か言いかけてやめる。極めて平静な様子でそれを見ている瑞穂と千種。

と、冷気の発する気の流れが、耳の奥で鳴る鈴のような音を立てている。今は、氷室家では誰も聞く事の出来なくなったと云われる『雪の声』であるのかも知れない。

千種　　……あっ？
瑞穂　　……
寛至　　何だ？
千種　　……
寛至　　……ん？
千種　　……別に……
瑞穂　　……
寛至　　チツ、またか……

と、急な悪寒に震え、自分の二の腕をさする寛至。
と、『雪の声』の中に混じる忍び笑い……それを無視しようと務めているような千種。そんな千種を凝視している瑞穂……

千種　　……
瑞穂　　……

と、何かに気付いたような寛至。

寛至　　ん……ん？　ん……!?

と、忍び笑いと『雪の声』が、パタリと消え……

参　オユキサマ

と、日向子が入り口に立って……

日向子　あの……
寛至　　あっ!?
日向子　……
寛至　　なんだ、あんたか……
日向子　……どうかなさいましたか？
寛至　　いえ……
日向子　大きな声を出されたから……

寛至 いやあ、別に……

と、寛至、そこまで云いかけて、瑞穂らと目が合う。

瑞穂 ……

千種 ……

寛至 ……別に……

日向子 ……はい？

寛至 何でもありませんよ、別に！

日向子 ……そうですか……

寛至 !?

日向子 あっ……？

寛至 ……

瑞穂 日向子さん。

日向子 はい。

瑞穂 何か……？

日向子 はい、あのお……もう遅いから、金満さんにはお泊まり頂くように……その、寛至は幼馴染おきななじみで小雪さんの……だから、夜道を帰す訳には行かない……と、氷室が申しまして……その……

寛至 そりゃあ、そうでしょうな。今から肉刺だらけの足で駅に向かったところで、夜行に乗れるとは限らんし……でも、有るんですか、あたしの泊まれるような部屋が？ 今の氷室家に……？

日向子 ええ、ですから……その……

瑞穂 ……私は構いませんけど、日向子さん。

日向子 すみません……

寛至 ん……ん？

日向子 ……千種さん。

千種 何ですか？

日向子 本当に悪いのだけれども、今夜は先生と一緒に……此処で休んで貰えないかしら？ 先生のお部屋は、金満さんを御案内しなければいけないくて……

千種 そうですか。

寛至 何だ？ あたしや此処で構わんぞ。

日向子 此処に……オシラサマのお部屋に、殿方をお泊めする訳には行かないの……

千種 良いですよ、別に……

日向子 ……御免なさい。堪忍ね……お布団とかは何とかがしますから……

寛至 あたしや構わんと云つとるじゃないか……

瑞穂 金満さん……

寛至 またか……あんたは……

日向子 氷室が……二十四代目が、それはならぬと申しますので。

寛至 ……

日向子 ……

寛至 ……あつ、そう。正平がね……

日向子 ……

寛至 ……では、泊めて頂くとしましうか。どうせ、今夜限りだ。あたしや忙しい身なのでね

……父無し子の部屋でも、肉刺まめを潰つぶしながら歩くよりはまし……

千種 帰った方が良いですよ。

寛至 あ？

千種 忙しいんなら、帰った方が良いですよ。

寛至 忙しいよ？ だから明日帰ると云っとるじゃないか。

千種 無理ですよ。

寛至 何が無理だ！

千種 帰れなくなりますよ。

寛至 帰ると決めたらかえりますよ、あたしやあ！

千種 でも降りますよ。

日向子 ……！

瑞穂 ……

寛至 ……はっ!?

千種 ……

瑞穂 ……

日向子 ……降るって、何が降るの？

瑞穂 ……

寛至 ……？

千種 ……別に…

瑞穂 ……

日向子 ……えっ…？

千種 ……

瑞穂 ……

寛至 ……

まただよ、またこれだよ。その思わせぶりが気に入らないんだよ。降るっていったい何が降るんだ？ あっ？ 雪でも降るのか？ 雪で帰れなくなると、そう云いたいのか。そうか、そういう事か。つまり、そうなのか。オユキサマになって、此処に居座りたい訳なのか。あ、あっ!?

千種 何ですか？

寛至 何だと!?

千種 何ですか、オユキサマって？

寛至 この…!!

瑞穂 金満さん。

寛至 ……

瑞穂 もう良いでしょう。

寛至 ……あのね…

瑞穂 知らないんですよ、千種ちゃんは。

寛至 はっ？

ですから、まだ知らないんです。オシラサマの事とか、オユキサマの事も…着いて早々に御父様のお通夜だったんですから、そんな事、とても。それに、この娘は教会で育てられましたから、そういう事…

寛至 教会？ あんたと同じ隠れ切支丹かね？

瑞穂 まさか…カトリックですよ。

寛至 カ、カトリ…？

瑞穂 カトリック。

寛至 ……

日向子 ……

千種
寛至

……
……いいよ。いいですよ、そう云う事にしといたって……だがね、そんな思わせぶりに引つかかる程、あたしや子供じゃ無いんだよ。だいたいさ、こんなにカラッとした天気で雪なんて降る訳ないんだよ！ そうだよ……思い出したぞお、実にありと思いついて来たぞお……あのな、氷室のオユキサマが『雪の声』を聞いた日はな、いつも、もっと、ドンヨリドヨドヨとして、カチーンと冷たい日なんだよ。そうだよ……だから、判った筈なんだよ。オユキサマじゃなくなっちゃって、雪が降るって判るんだよ。だいたいな、こんなに西日がピシヤーっと入って来る日にゃあ……

と、寛至が窓を指さすと、室内を朱に染めていた西日が見る見る翳^{かげ}って……

寛至 ……は？

日向子 ……えっ？

瑞穂 ……

千種 ……

寛至 不愉快だ!!

日向子 ……

寛至 ……日向子さん。

日向子 ! はい。

寛至 お願います……ああ、その前に御挨拶でもしますかね、御当主様に。

日向子 えっ？

寛至 いけませんか？

日向子 いえ、あの……^{かしこ}畏まりました。

寛至 宜しく。

日向子 ……どうぞ。

寛至 うむ。

と、寛至、日向子に先導されて去りかけるが……

寛至 ああ、えつとお……先生。

瑞穂 はい。

寛至 一つ宜しく頼みますよ、例の……

瑞穂 奉安殿ですか？

寛至 ……ホウ？

御写真や教育勅語を収める祠みたいなものですよ。そうですね、間違いがあったら困りますから。

寛至 うむうむ。

瑞穂 校長先生にきちんと朝礼していただきますわ。扉を開けたりしないようにね。

寛至 罰が当たらぬようにかね？

瑞穂 そうですね。

寛至 あ？

瑞穂 昔、火事で御写真を燃やしてしまった校長先生が、自決なさった事もありますからね……

寛至 ……あつ、そう。

瑞穂 はい。

寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 日向子さん。
日向子 はい。

と、退室する寛至と日向子。去り際に……

寛至 時に、日向子さん。あんた、此処に入って来るとき、笑っておったかね？
日向子 私ですか？
寛至 うむ。

日向子 ……いいえ？
寛至 ……そうかね……あたしや、てつきり……

と、日向子、寛至、退室。

四 オシラサマ

と、寒い『部屋』に残された二人の女。その間には、冷氣とはまた違った気が流れていて……

千種 笑ってましたよね。

瑞穂 えっ？

千種 笑ってたじゃないですか。

瑞穂 誰が？

千種 最初は瑞穂さんかなって。でも……

瑞穂 聞こえたの？

千種 はい。

瑞穂 そうなんだ。

千種 誰ですか？

瑞穂 ええ……

千種 はい？

瑞穂 深雪ちゃんだわ……

千種 深雪さん？

瑞穂 貴女の……直ぐ上のお姉さん……に、なるんだわ。

千種 お葬式には出てなかったですよ。

瑞穂 ちよつと、病気でね……心の。それで、ある『部屋』にいてね……人前には出ないのね。

と云うか……

千種 出さないんだ。

瑞穂 体面に拘るのよ、こういう古い『家』は。

千種 そうですか。

瑞穂 お父さんには、貴女の前に三人の子供達が居て、それがね、二十四代目になった正平さん

と、スペイン風邪で亡くなった小雪さん、それから……深雪。深雪と私は同じ日に生まれてね……まあ、それやこれやで、私はお世話になったのよ、この『家』に……子供の頃から……

千穂

…
そうですか。

瑞穂

正平さんの奥さんが、日向子さん。親族と云ったって、もう、そんなものだよ……後は、亡くなった小雪さんがお嫁に行った……

千穂

それが、今の人でしょうか？

瑞穂

そう。金満の寛至さん。

千穂

楽しい人ですね。

瑞穂

金満さん？

千穂

はい。

瑞穂

たいていはあんな風なのではなくて、成功して、お金を持っていて、それが自信になって

千穂

いる男の人は。
そうですね。あの人が……

瑞穂

何？

千穂

……お姉さん……の、旦那さん……

瑞穂

どうしたの？

千穂

……ええ……

瑞穂

別に、じゃないんだ。

千穂

……そうですね。

瑞穂

変な感じだった？

千穂

何ですか？

瑞穂

お姉さん、って云ってみて。

千穂

……そうですね。

瑞穂

仕方がないわよ。

千穂

そうですね？

瑞穂

……

千穂

……

瑞穂

……お疲れ様。

千穂

平気です。

瑞穂

……お父さんの時はどうだった？

千穂

何ですか？

瑞穂

少しでも、お話がしたかった、やっぱり。

千穂

そうですね。でも……

瑞穂

何？

千穂

困っちゃったかもしれません。

瑞穂

そうなんだ。

千穂

はい……

瑞穂

……

千穂

あの、顔を見たじゃないですか、白い布をとって。

瑞穂

ええ。

千穂

その布をめくる時にね、お兄さん……

瑞穂

いいわよ、正平さんで。

千穂

……

瑞穂

それとも、氷室さん？

千穂

……そうですね……

瑞穂

じゃあ、病気の人。

千種 フフッ……

千種 ……

千種 いいですよ、お兄さんで……慣れます。

千種 そう。

千種 お客さんを呼ぶみたいに、お兄さんって云ったら、楽かもって。

千種 そうなんだ。

千種 それで、布をね、めくる時……手をかけた時にね……

千種 うん。

千種 お兄さん、泣き出したじゃないですか？

千種 そうね。

千種 隣でね、奥さんが……

千種 日向子さんね。

千種 ええ。あの人が、泣き出すのを堪えて、我慢してるのが判って、それで……

千種 それで？

千種 ……考えちゃったんです。

千種 泣かなきゃいけないかなって？

千種 判りますか？

千種 ……

千種 泣くじゃないですか、映画とかお芝居とか、そういう色々だと……

千種 そうね。

千種 考えていたんです。

千種 何？

千種 泣くのかなって……本当のお父さんや、お兄さんとかに会ったら泣くのかなって、そんな風に泣くのかなって……泣くんだったらうなって、そう思ってたんですけど……

千種 震災で、教会の神父様が亡くなった時は？

千種 ……

千種 泣いたの？

千種 ……泣きませんでしたね。

千種 ……

千種 あたし、生きてるって……瓦礫から這い出して、炎の中を潜って、それで……思ったんです、まだ生きてるって。ポーっとして、お腹が空いて、揺り返しも怖かったし……

千種 そうなんだ。

千種 それやこれやで、だいぶ後になって、想い出して……ちよっただけ泣きました。

千種 今度は、想い出す事、無かったものね。

千種 そうですね。

千種 ……

千種 ……

千種 あの……

千種 何？

千種 訊いてもいいですか？

千種 何かしら？

千種 何ですか、オユキサマって？

千種 ……ええ……

千種 ……この氷室ではね……この村では、オシラサマを降ろして、御託宣をする方をそう呼ぶのよ、

千種 平気です。憶えてるだけですから。
瑞穂 そうなんだ。
千種 はい。
瑞穂 じゃあ、おんなじかな、私と。
千種 どうしてですか？ ああ……隠れ切支丹で……
瑞穂 まあね。
千種 それって……
瑞穂 それは、後で……まずは、オシラサマね。
千種 ああ、そうですね。
瑞穂 ちよつと坐ろうか？
千種 そうですね。

と、瑞穂と千種、対座する。

瑞穂 あれが、オシラサマを収めた祠。
千種 はい。
瑞穂 オシラサマはね、『家』を守る神様ね。それから、病平癒……目の病気を治したり、それから、お蚕さんの神様ね。

製糸工場をやっていた氷室にとっては、大事な神様よ。

千種 ……
瑞穂 こんな言い伝えがあるのね……昔、この村に金満長者という人が居てね、玉や御前という美しい娘があつたつて。それから、長者は梅檀栗毛という御自慢の名馬を飼っていたんだけど、その馬がね、玉や御前に恋をしてしまうのね。恋い焦がれて、餌も食べなくなつて……それでも、玉や御前の手からだけは食べたつて。それで、玉や御前もその馬を可愛がつて、こつそりと夫婦になつてしまうのね。

馬と？
ただの、言い伝えよ。

……
何？

レビ記十八章二十三節……

「汝^{けもの}獣畜と交合して之によりて己^{おの}が身を汚すこと勿^{なか}れまた女たる者は獣畜の前に立ちて之と接^{まじ}ることを勿^{なか}れ之憎むべき事なり」

あつ。
憶えてるだけよ……続けるわね。
はい。

それでね、長者は玉や御前と梅檀栗毛が夫婦になつた事を知つて、たいそう腹を立ててね……切支丹だったからじゃないけど、畜生の分際で生意気だつて……

……
それでね、娘が眠っている間に、梅檀栗毛を桑の木に吊して……

桑の木ですか？
そう、桑の木。それに吊して、殺してしまうのね。それから馬の皮を剥いでしまうのだけど、玉や御前は、夢で馬が殺された事を知つて……馬の亡骸に取り縋つて泣いたのね。
やっぱり、泣くんですよ。

そうね……そうしてね、娘が嘆いていると、一天俄にかき曇り……

千穂

講談みたい。

瑞穂

うん……嵐のような風が巻き起こって、馬の皮が、娘と馬を包んで、天に昇って行ったって。それで、その後にな……

千穂

はい。

瑞穂

一番の虫が落ちていたんだわ。桑の葉と一緒に、馬の顔をした虫が。

千穂

それがお蚕さんなんだ。

瑞穂

そう。それから長者の家は、御蚕様を育てて、絹を紡いで、一段と豊かになったそうよ。

千穂

その桑の木から、一對の像が彫られて、オシラサマになって、天に昇っていった娘と馬の依代になったのね。それが、この氷室にあるオシラサマなの。

瑞穂

じゃあ……この家が、その長者の？

千穂

ううん……長者の血筋は、金満の家に伝わっているって。

瑞穂

あの、金満さん。

千穂

そう。

瑞穂

それがどうして……？

千穂

オシラサマはね、遊ばせてあげないと祟るのよ。

瑞穂

祟るんだ。

千穂

一年に二度、オシラホロギというお祭りをするのね。村中の女の人が、此処へ集まって……

千穂

……みんなでお呪いを唱えてね、祠を開けるの。それから……口寄せをする人が、オシラサマ

千穂

の像を両手に持って、先刻の……長者と、娘と、馬のお嘶をしながらオシラサマを遊ばせるのよ。それをする人がオユキサマ。

千穂

ああ、そうなんだ。

瑞穂

それで、オシラサマがそのオユキサマに乗り移ってね、色々と御託宣をするの。今年は豊

千穂

作だとか不作だとか、地震が起きるとか起きないとか、誰その家に跡取りが生まれるとか、生まれないとか……でね、そのお祭を絶やすと……

千穂

それで？

瑞穂

それでよ。金満長者の家は傾いて、もう一つの名代の家に、オシラサマは移されたのね。

千穂

それが、昔から都の天子様の氷室……夏に食べたりする氷倉ね、それを守っていた家なのね。

千穂

ふうん……そうなんだ。

瑞穂

でもね、氷室の家も、ずっとオシラホロギをしていないんだわ。

千穂

だから、ですか？

瑞穂

どう思う？

千穂

……判んないです。

瑞穂

そうよね。

千穂

……

瑞穂

……

千穂

お呪いって、どんなのです？

瑞穂

聞きたい？

千穂

はい。

瑞穂

……

千穂

……

瑞穂

こうやって、指先を合わせてね……

千穂

はい。

瑞穂

ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……これの繰り返し。

千穂

……

瑞穂

憶えた？

千種　　はい。
瑞穂　　一度聞いただけで？
千種　　はい。
瑞穂　　……
千種　　やってみましょうか？
瑞穂　　……うん。

と、千種、印形を作って布留部の唱文を唱え始め……

千種　　ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやここのたり、
ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひ
ふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。
瑞穂　　……凄いのね。
千種　　そんな事無いですよ。
瑞穂　　凄いわよ。

と、再び布留部を唱え始める千種。向かい合って、瑞穂も加わる。何やら
数え歌を歌っている姉妹のように見え……

と、唱文に呼応するように高まって行く『雪の声』が重なって……

伍 貳拾四代目

と、寛至、入って来て唱文の様子を見て立ちすくむ。

寛至　　何をやっとするんだ!!

と、千種と瑞穂が唱文を止めると、『雪の声』も途絶えた。

瑞穂　　別に……
寛至　　何だ？
瑞穂　　はい？
寛至　　何だ、別にとは!?
瑞穂　　ですから……
寛至　　何なんだ!
瑞穂　　はい。
寛至　　何なんだと、訊いとるだろう!!
瑞穂　　ですから、そんな風に言葉を切られたら、何も申し上げられないじゃありませんか、金満
　　さん。

……そうか。

はい。

……で？

はい。

寛至
瑞穂
寛至
瑞穂

寛至 何をやとつたのかね？
瑞穂 ですから、別に……

寛至 あっ！
瑞穂 ……

寛至 …… 続けないさい……
瑞穂 はい……ですから、別にただ遊んでいただけですけど……

寛至 ……
瑞穂 ……

千種 ……
瑞穂 ……

寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

瑞穂 ……
寛至 ……

と、日向子に肩を借りながら入って来る正平。
と、瑞穂、道をあげて整然と頭を下げる。千種も真似て同じように……無然と
して立っている寛至。
と、正平、壇上に向かって。

日向子

正平

あなた……
良いのだ。構うものか。

と、一瞬、息の止まるような緊張が走る。

寛至 ほう……良いのかね、正平君。

と、答えずに壇上にあがり、威厳たつぷりに坐る正平。日向子がそばに控え、瑞穂達は改めて首を垂れる。立ったまま、上目がちに見ている寛至。

正平 寛至か……久しいな。

寛至 ああ、そうだねえ。

正平 まあ、坐ったらどうだ。構わんぞ、坐って。

寛至 それはどうも、正平君。

正平 義兄さんだろ？

寛至 ……そうとも云うね、義兄さん。

正平 フツ……坐れよ。坐って良いと云つとるんだから。

寛至 御当主様が、かね？

正平 そうだよ。

寛至 あっ、そう……それでは……では、ではでは……

と、寛至、坐って、極めて儀礼的に、しかし完璧な作法に則って手をつき……

寛至 この度は、真に御愁傷様で御座いました。

正平 ……

と、一同、正平の返礼を待つて硬直した、間……と……

日向子

御丁寧……有り難う存じます。

と、日向子、優雅に返礼する。呼応して頭を下げる瑞穂、千種……皆が頭を下げている『部屋』で一人、じつと寛至を睨むように凝視している正平。
と、寛至、頭を下げたままで……

寛至 重ねて、氷室正平殿の氷室本家第二十四代目の御襲名……お祝い申し、上げ奉ります。
正平 ……

と、誰も答えない。白々しい間があつて、ピヨコンと頭を上げる寛至。

寛至 違うんですか？

正平 違わないよ。

寛至 そりゃあそうでしょうなあ「国家一日も君主なかるべからず、君主一日も位をむなしうすべからず」なんですから。国家と同じく、一家も主を絶やしちやいけませんからねえ、義兄さん。

正平 そういう事だな。有り難うよ、寛ちゃん。
寛至 いやいや。

と、瑞穂と千種、頭をあげる。日向子は、伏し目がちに手をついたままで
……

寛至　これで、君にもしもの事があつたら……

日向子　……

……いや、失敬……なあに、南瓜が出来ないからって、畑が悪いからとは限らんでしょ。
ちゃんとした種を蒔かなきゃ、野菜は生えちゃ来ませんよ。ねえ、義兄さん。

正平　千種……

千種　はい。

正平　おまえ、東京にいい人でも居らんのか？

千種　はい？

正平　そんな人が居るなら、こっちへ呼び寄せて、婿にしたらい。二人で氷室を継いで構わ
ぞ。

日向子　あなた……？

正平　お父さんもそのつもりだった筈だ……

寛至　筈だって……正平君、千種は源一郎さんの死に目に遇えなかったのだから？ 君の祖父さん

が許さなかったから、認知だつてされとらんし、養子縁組とかもしとらんのだろ。相続権な
んぞ無いと違うのかね？　そうですね、センセ。

瑞穂　そうですね。

それにな、源一郎さんは入り婿じゃないか。その入り婿が女中に生ませた子、ちちゅう事
はだぞ、氷室の血なんぞ一滴も入っちゃおらんという事だろうが、正平君。

正平　正平君に戻ったな、寛ちゃん。

あやしや血の事を言つとるのだよ正平君。つまり、氷室の血が絶えるという事じゃないの
かね？

正平　名前は残るさ。氷室の名が。

寛至　……ほう……

正平　千種。

千種　はい。

俺はこの通りだからな……俺が死んだ後に、日向子を後添えにして、ちゃっかり氷室の才
シラサマを自分の物にしようと企んでいる奴が居るんだ。

日向子　……

寛至　ほう、何処に？

正平　お見通しだよ寛至君……早く婿をとつて、氷室を継いでくれや、千種。

正平　……

だから……氷室を継ぐなんて出来んだろ。だって氷室じゃないんだから。源一郎さんは逝
つちまつて、養子縁組してないんだし、出来ないだろ。だって逝つちやつたんだから。

正平　……

瑞穂　出来ますよ。

寛至　あっ!?

瑞穂　出来ますよ。

寛至　何だ!?

瑞穂　ですから……出来ますよ、養子縁組。

寛至　何で？

正平さんと日向子さんの養子になれば良いんですよ、千種ちゃんが。

寛至 ……はっ？

瑞穂 ……

ちよつとあんた、正気で物を云つとるのか？ 千種は源一郎さんの娘だろ？

寛至 そうですね。

瑞穂 つて事は、正平と千種は兄妹つて事だろ？

寛至 そうですね。

瑞穂 兄が妹を養子にするつて、そんな事が通る訳無いだろ！

寛至 ですから、兄妹じゃ無いんですよ。

瑞穂 何だ!?

寛至 紙の上では。

瑞穂 ……

戸籍上は、赤の他人なんですよ。それに……どうせ紙の上だけの事ですから、養子縁組なんて。

正平 そうか……すまないねえ、先生。

瑞穂 いえ……

正平 と、云う事らしいぞ、寛ちゃん。

寛至 ……

瑞穂 まあ、千種ちゃんに、その気があればの話ですけど。

寛至 あっ、そう……で？

瑞穂 はい？

寛至 どうなんだね……？

千種 ……

寛至 ……ん？

正平 ……別に。

寛至 ……

……ほらほら。まただよ。またコレだよ。こんなんで良いのかね、正平君。だからあたしやあ血の事を云つとるんだよ。宜しいかな、あたしや来る第一回日本ダービーの為に……ダービーって知らんだろうから、説明するとだね……

千種 千七百八十年、第十二代ダービー伯爵創始。英国は倫敦郊外エプソム競馬場でサラブレッド三歳馬によって行われる特別レース……です。

寛至 ……知ってるのかね……？

千種 別に……憶えてるだけです。

寛至 ……あっ、そう。

千種 はい。

……で、だよ。そのサラブレッド三歳馬……明けて四歳馬だな……その特別レースを我が国でも初めて目黒で開催する訳なのだよ。あたしやあ、そのレースに、あたしの馬を出走させる為にだ、日々コレホントに忙しいのだがね……そりやあね、英国のサラブレッドの血統という物はね、実にこう……ピシャーッと……はつきりして居るのだな。馬の足の早い遅いは、そりやあもう、殆ど血筋なのだよ。だからだね、血筋というのは、しつかりと、ピシャーッと保たねばならぬ物なのだよ。解るかね？ 血筋がハッキリ迫れるのは、サラブレッドでなきやあ、畏れ多くも……天皇陛下のお血筋ぐらいなものだがね、つまり、だから、しかるがゆえにだよ、高貴な血という物は、しつかり、ハッキリ、ピシャーッとしとらにやならんのだよ。あたしやね、その点について、二十四代目の注意を喚起しておる訳なのだな。

瑞穂 そうですか。

寛至 そうだとも……だいたいさ、あんた何で氷室の家の事に嘴を突っ込むんだ。それこそアレ

だろ。あんた赤の他人じゃないか……

日向子
金満さん……

寛至
はっ？

日向子
先生には……とつてもお世話になってますから……

寛至
……

日向子
……

寛至
……あつ、そう……成る程、そういう事ですか。

日向子

寛至
氷室製糸の工場を潰してさ、山も田畑も家屋敷も手放して、いったいどうして食べてるんだって心配だったのだから……そういう事ですか、正平君。

正平
……

寛至
そりゃあそうだよねえ、君はそんなだしさ、君達の看病やら世話やらでんでこ舞いの日向子さんが働きに出られる訳じゃ無しさ……それでもあたしの援助を断るんだから、どうしてるのかなって思ってたんだよ正平君。工場だって、家屋敷だってあたしが買ってやるって云ったのになあ、正平君。

正平
……

寛至
正平君、で良いのかね、義兄さん。

瑞穂
母が亡くなって……

寛至
ああん？

瑞穂
母を亡くしてから、お世話になったのは私の方ですから……御恩返しは当然と思います。

日向子
……

日向子
……あつ、そう……まつ、良いご身分だよねえ、正平君。

寛至
俺だって……

正平
俺だって、アレだぞ……風邪を拗らせたりしなけりやあ……

正平
は？

寛至
……

正平
……

正平 大正六年だった。俺が……俺と親父が株で失敗した年だ。あん時、俺は初めてお前に頭を下げたな。

寛至 そうだったね。

正平 ……だから、小雪を嫁にくれと云われても、俺も、親父も断れなかった。祖父さんはカンだったよ。金満の俸に恩を受ける気かってな……祖父さんは……祖父さんは吐き捨てるみたいに怒鳴ったよ。『雪の声』を聞けない娘を氷室に置いといても仕方がないから、金満にでも誰にでもくれてやれって……俺は思ったよ、妹を売ってお前に助けて貰ったんだって……あんな想いは、二度と……それにな、俺は知ってるんだよ。お前が本当に欲しかったのは、小雪じゃなくて、日向子……

と、正平、再び咳き上げて……

寛至

小雪はねえ……ホツとしていたよ、義兄さん。氷室の長女に生まれ来て、『雪の声』が聞こえなかったんだからさ……そんな村中の視線から解き放たれてさ、ホツとしていたよ。ほんの一年足らずだったけどね、逝くまであいつは幸せだったんだと思う事にしてるんだよ。あたしは……そう思わなきゃ、あたしだってやっていられんのだ。

と、寛至、立ち上がった。

寛至

……もう、休ませて貰いますよ、奥さん。

日向子

はい。

寛至

女はねえ、嫁に行けばその家から出られるんだね。嫁に行って、別の家に縛られるって事もありますがね……

日向子

……

寛至

フアゴールを使ってみなさい。今度、新しく出た肺病、喘息、肋膜炎等々の新薬です。こへ送るように手配しますから……尤も、正平のは「病は気から」ってヤツのような気がしますがね……

日向子

……

正平

……

寛至

……失敬。

と、足早に出て行く寛至。

と、大きく正平が咳き込んで……

日向子

あなた!?

瑞穂

日向子さん、もう……

日向子

はい……手を貸してくださいますか？

瑞穂

はい。

と、日向子と瑞穂、正平を立たせようとして支える。

正平

平気だ、一人で……

日向子

駄目ですよ。

瑞穂

ちよっと待っててね。

千種

はい。

と、日向子と瑞穂に支えられて、正平、退場。

六 玉や御前

と、寒い『部屋』に千種が独り残ると、あの『雪の声』が、いっそう重々しく……今度は、はっきりと聞き耳を立てている千種。その『雪の声』に呼応するように布留部の唱文を唱えてみる。

千種

ひふみよいむなやこののたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……ひふみよいむなやこののたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

と、『雪の声』の中に、あの忍び笑いと同じ布留部の唱文が木霊するように混じり……

深雪

ひふみよいむなやこののたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

千種

ひふみよいむなやこののたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

深雪

ひふみよいむなやこののたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

と、祠の脇、榊のように飾られている壇上の袖……ある筈のない出入り口から現れる声の主……深雪である。白い浴衣の上に、嫁入りの為の振り袖を羽織り……だが、精神を病んでいるように着付けは崩れ、振り袖の裾が引きずられていて……

と、千種と深雪、目があつて……

千種

……

深雪

だあれ？

千種

千種。

深雪

わたし、ミュキ……

と、深雪、振り袖を千種に見せびらかすようにしてクルクルと回る。

深雪

良いでしょう？

千種

うん。

深雪

フッフッフツ……

と、深雪、またクルクルと舞う。

千種

お姉さん？

深雪

……

千種

……お姉さん、ですよね？

千種 ……はい？
深雪 ちよつとガツカリ。貴女は妹だと思ったのにね……瑞穂と同じかと思ったのにね……
千種 瑞穂さん？
深雪 ええ、私達は……瑞穂と私は、双子なの。
千種 同じ日に生まれたから？
深雪 ……うん……
千種 ……はい？
深雪 ……
千種 はい？
深雪 瑞穂は、御父様の子供だもの……私達は、腹違いの双子だわ。
千種 ……
深雪 ……フン……
千種 ……はい？
深雪 フッフッフッフッフッフッフ……
千種 あの……
深雪 ……
千種 誰ですか、御父様って……？
深雪 あっ……！！
千種 何ですか？
深雪 二人だけの秘密、だったんだわ……忘れてた。
千種 ……
深雪 フッフッフッフッフッフッフ。
千種 深雪さん……
深雪 ねええ？
千種 はい？
深雪 代わってよ。
千種 はい？
深雪 代わって。
千種 ……はい？
深雪 オユキサマよ。代わって、私と。
千種 ……
深雪 瑞穂は代わってくれなかったわ……貴女は？
千種 あの……
深雪 聞こえるんだもの、なれるわよ……

と、深雪、壇上の祠に向かって、柏手を打った。

深雪 ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ!!

と、封印の注連縄を引きちぎる深雪。

深雪 あはりや、あそばすとまうさぬ、ひむろぎに、おしらのおかみ、おりましたませ。おしらのおかみ、おりましたませ！

と、開かれる祠。静かに並んでいる一対のオシラサマ。

深雪　これが、氷室のオシラサマ。
千種　……
深雪　貴女のものよ、今日から。
千種　でも……
深雪　だから、呼んだのではないの？
千種　はい？
深雪　呼んだでしょう？
千種　……はい？
深雪　ひふみよいむなやここのたり……って……
千種　……はい……？
深雪　欲しかった、のではないの？
千種　……
深雪　……別に……
千種　……なあんだ……
深雪　……
千種　やっぱり、馬鹿みたい。
深雪　……
千種　叱られるかしら、また……
深雪　……？

と、虚脱したように榊の陰に向かって行く深雪。

千種　あの……！
深雪　……またね。

と、深雪が消えて行くと、『雪の声』が高まり……それは祠の中にあるオシラサマから放たれているようでもあり……

と、ゆっくりとオシラサマに近づいて行く千種。
と、そこに、瑞穂……

瑞穂　……開けたの？
千種　深雪さんが……
瑞穂　……深雪？
千種　はい。
瑞穂　来たんだ、深雪ちゃんが……
千種　はい。
瑞穂　……
千種　あの……
瑞穂　……
千種　お姉さんなんですか……？
瑞穂　何？

千種 お姉さんなんですか、瑞穂さん？
瑞穂 ……
千種 双子だって云ってましたけど。
瑞穂 深雪ちゃんに聞いたの？
千種 そうですけど……
瑞穂 ……そうなんだ……
千種 ……
瑞穂 ……フッフッフッフッフ……
千種 ……あの……

と、また高まる『雪の声』……それに『布留部』の唱文が混ざる。深雪の
声だけではなく、先代のオユキサマ……正平と深雪の母である雪代の声が
混ざり……その姿が祠の脇に浮かび上がって……

深雪・雪代 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやこの
たり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふる
べ……

と、唱文が続き、先代のオユキサマ雪代が、遠い過去から舞い降りるよう
に、冷気と共に部屋の中へ……そして、水面を滑るようにして、瑞穂と入
れ替わり……
と、部屋をすり抜けるように、その『時』の入れ替わりを俯瞰している、
千種……彼女の姿も、客席の奥へと消えて行き……

七 御父様

と、布留部の唱文が、一人だけになり……オシラサマの祠の前で、合掌し
ながら唱文を唱えている巫女の姿が……

明治三十九年、暮……

と、神降ろしの為に、では無く、何かを振り切るように、一心に唱文を唱
えている雪代。

雪代 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやこのたり、
ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

と、その『部屋』に静かに入って来る父・晁悦。

雪代 ひふみよいむなや……

晁悦 ……

雪代 ……御父様？

雪代……

……はい。

深雪が、『雪の声』を聞いたそうだな？

はい……丁度、満で四つの誕生日でした。

そうか……で？

はっ？

あっちは、幾つになったかな？ 源一郎の娘だ。

小雪です。

そうだな、小雪だ。

御父様の孫です。ちゃんと名前を云ってやって下さい。

そうか……

……

で、幾つになったのだ、小雪は？

満で、九つになります。

九つ……

まだ判りませんよ……

いや……あれは、もう……

……

お前が聞いたのは、幾つの時だったね。数え五つの年の瀬じゃなかったか？

……ええ……

やはりな……父親の血がいかんのだよ。源一郎をお前の婿にとつたのは、儂の一生の不覚

だった。あれは……悪い血だ。

そんな……

正平もなあ……どうして氷室の血筋から、あんな出来損ないが生まれて来たのかと思つた

が……

酷すぎます、出来損ないだなんて……

出来損ないだよ。運動も勉学も金満の俸に敵わんと云うじゃないか。

でも、まだ……

もう子供じゃあ無いよ。武家なら元服の歳だ……歳が違つたつて、大人になれば差は縮む

モノだよ、普通はね。アレは、どうだい？ 差は開いて行くばかりじゃないのかね？

みんな、私の子です。

……

……

あれに二十四代目が務まるかどうか……その前に、源一郎に二十三代目を任せるのもなあ

……

御父様……

庇う事は無かろう。入り婿の分際で、女中に手を着けるような男だ。すずの胎の子は、お

前の子じゃあ無いよ。氷室の血なんぞ一滴も入つとりやせん……悪い血だ。

それを……

うん？

それを責める資格が……私達にありますか、御父様？

……

……

……フン……

……

雪代　　しくない教育を受けさせてやりたいのだ。で……

何を考えていらつしやるんです？

暁悦　　つまり、そういう事だよ……正平の嫁に、瑞穂をな……

雪代　　御父様……！

暁悦　　イヤだ……！　とは云わせないよ。

雪代　　……

薄まった血を、元に戻す為だよ。深雪に婿を探すよりも、正平と瑞穂の子に望みをかける方が……

雪代　　馬をかけ合わせるような事を……

暁悦　　考えるんだよ。そういう事を考えるから、家の馬は軍の御用達になるのだよ。そういう事に頭が回らないから駄目なのだ、お前の亭主は。お前の亭主がこさえた息子も……悪い血だ。

雪代　　……

暁悦　　曾孫がな……深雪か瑞穂の産む曾孫がな……

雪代　　曾孫、ですか……

暁悦　　曾孫だよ？　その曾孫が、『雪の声』を聞けるようなら、家督をそこでな……それまでは生きていたいのだと思っているよ、儂は……

と、雪代、暁悦に唾を吐きかける。

暁悦　　……父親の顔に唾をするかア！！

と、暁悦、雪代に平手打ち。雪代、倒れて……

雪代　　……父親、ですか……

暁悦　　……

雪代　　男と女の事をして、娘まで産んで……親子でいられる訳がありません……

暁悦　　娘だよ。

雪代　　……

暁悦　　お前は、儂の娘だよ……雪代……儂の妻の産んだ娘だからね。氷室の、オユキサマだよ……

雪代　　……

と、暁悦、静かに『部屋』を出る。

と、しばし放心したような雪代、オシラサマの祠に向かい、憑き物が憑いたように布留部を唱え始め……

雪代　　……ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ！　ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ！！

と、次第に高まる声に、『雪の声』と、深雪と瑞穂の唱える布留部の唱文が重なり……

時の彼方へと去る雪代と瑞穂の姿が入れ替わって……

八 口寄せ

と、そこには、オユキサマの振り袖を羽織った瑞穂……それを背後から見
つめている千種が……

瑞穂 ええ、私達は……私と深雪は双子なの。

千種 同じ日に生まれたから……じゃ、なくて……

瑞穂 ええ……私達は、腹違いの……双子。

千種 ……

瑞穂 ……

千種 御父様って……

瑞穂 ……フッフッフッフッフッフ……

千種 瑞穂さん……？

二十二代目よ。氷室、晝悦……貴女にとっては、義理のお祖父さんになる人ね。貴女には、あの男の血なんて、一滴も入っちゃいけないけど……だからね……

千種 はい。

瑞穂 私と深雪は双子の姉妹よ。でも、貴女と私は、姉妹ではないの……

千種 ……そうですか。

……あの男はね……二十二代目よ。あの男は、雪代さんを……自分の実の娘をね……それで、深雪が生まれたの。それから、私の……

千種 ……

瑞穂 あの……

千種 ……何？

瑞穂 聞こえる……んですよね……？

千種 ……

瑞穂 ……

千種 ……聞こえるわ。

瑞穂 ……

千種 判っていたでしょう？

瑞穂 ……そうですね……

……雪代様とね、深雪と、私はね……同じ血を受けた三姉妹、なんだわ……

と、少し前から『部屋』の入り口に立っていた寛至、日向子……

日向子 先生……？

瑞穂 ……

日向子 本当ですか？

瑞穂 ……

日向子 本当ですか、今の話……

瑞穂 ……

日向子 先生……

瑞穂 ……

日向子

瑞穂！

瑞穂

……本当ですよ。

寛至

嘘をつけ！

瑞穂

……

寛至

こいつはな、氷室が欲しいんだ。氷室のオシラサマが欲しくて、こんな出鱈目を云ってるんだよ。決まってるじゃないか……！

瑞穂

良いですよ……

寛至

あっ！

瑞穂

だったら良いですよ、それで……別に、構いません、それで……

寛至

あのね……

瑞穂

私には……ありませんから。

寛至

あっ！

瑞穂

私にはね、無いんですから……紙の上でも、『家』の中でも、そんなモノは無いんです。

私は永邑の隠れ切支丹の父無し子です。だのに……無いのにね、ただ聞こえるんです。それが……

……

寛至

それが、鬱陶しいんです……

瑞穂

瑞穂ちゃん……

日向子

フッフッフッフッフ……

千種

……

瑞穂

深雪を……呼びます。二人だけの秘密を話してしまうんだもの……叱ってあげなくちゃ……

……

と、瑞穂、低徊するようにして、舞台の突端へ進み……その物腰は、狂気を含んだ深雪の姿を想起させ……空気よりも軽い何かを着床するように坐すと印形を組んで……

瑞穂

ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

日向子

瑞穂ちゃん……先生！

瑞穂

ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

寛至

……ちよつと、あんたね……

瑞穂

ひふみよいむなやここのたり……

寛至

お止めなさいよ、ちよつと……！ 日向子さん、まさかこんな事に付き合わせようって呼んだ訳じゃないですよね？

いえ、あの……

日向子

……ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

瑞穂

どうしたんですか？

千種

ん？ 正平がな……何だかどうしても話したい事があるから、此処へ来いと云つとると云

うから、ヒナ……奥さんに云われて来たんだよ。とっくに休むつもりでおったのだがね……

千種

……

瑞穂

ひふみよいむなやここのたり……

と、瑞穂が低く唱える唱文が途切れる事無く……

寛至

……馬鹿馬鹿しい！ 何だと云うのだ、この茶番は……何なのだ、深雪を呼ぶとは？ 深

雪なら、とつくに……帰らせて頂きますよ、日向子さん。

日向子

はっ？

もう、コレまでだよ。あたしだって、この国の出ですからね、駅まで歩いて、始発を待ちますよ。あたしの足なら丁度……

寛至

千種

無理ですよ。

寛至

あっ！

千種

降り続くから無理ですよ。

寛至

あっ！

千種

そういう雪じゃ無いんですよ。

寛至

……あっ？

千種

深雪さんもそう云ってました。

寛至

……深雪……？

日向子

ああっ！！

寛至

あっ!!

日向子

……

寛至

……

瑞穂

ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

と、日向子と寛至、オシラサマの祠が開け放たれている事に気付いて……祠の内側から吹くかのような風が、『雪の声』をあげながらオシラサマのオセンダクを揺らして……

と、日向子、血相を変えて祠の扉を閉める。『雪の声』が途切れ、瑞穂の唱文も中断されて……

寛至

……

日向子

貴女が、開けたの？ それとも、先生が……

千種

深雪さんです。

寛至

……

千種

聞かせて貰って良いですか、深雪さんの事？

日向子

……

寛至

……

千種

聞かせて下さい。

日向子

……

寛至

……あたしは、遠慮します。

日向子

金満さん……？

寛至

正平を呼んで来ます……とても……

日向子

はい？

寛至

とてもね、耐えられんのです……こういう事は、つまり……

日向子

……

寛至

あのね、お稲荷さんの祠を開けてですよ、つまりは誰かが……人の作った土人形や、木彫

日向子

りや、絵があつたりして、あたしやあガツカリしたと云いましたよね……でもね……その……

寛至

……期待していた……いや、思いもつかないモノを見てしまうとですね……

日向子

……寛至さん……

寛至 御勘弁下さい。男はね……

日向子 はい？

寛至 ……こういうアレには、実は弱いモノなんですよ。その……あんただから、こういう事が

……

日向子 ……

寛至 失敬。

と、寛至が逃げるように去ると、瑞穂が低い低い唱文を、再び……

瑞穂 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

日向子 ……御免なさい。

千種 ……

日向子 良いですか、訊いて？

千種 えっ？

日向子 深雪さんの事……

千種 ……

日向子 お義姉さん。

千種 ! えっ？

日向子 ……深雪さんの事……

千種 ……

日向子 ……

千種 ……深雪ちゃん……深雪ちゃんはね……

千種 はい。

日向子 亡くなったんです……

千種 ……はい？

日向子 二年とちよつと前……昭和四年の十月二十四日。紐育の、暗黒の木曜日って呼ばれた日……

……

千種 はい？

日向子 それから、その日から……氷室にはオユキサマが居なくなったのよ。

千種 ……そうですか……

日向子 聞いていなかったの、先生から？

千種 ……心の病気で、ある『部屋』について……

日向子 ……そうなの……

千種 はい。

日向子 ……此処よ。

千種 はい？

日向子 此処……このね、オシラサマを祀るお堂がね、深雪ちゃんの『部屋』だったんだわ。此処

で、独りで……オシラサマと遊んで……

千種 ……そうですか。

日向子 主人の母の、雪代様が亡くなってから、氷室のオユキサマは、深雪ちゃんに……だって、

『雪の声』を聞ける人が、もう他に居なかったから。でもね、深雪ちゃんの好きな人が、シ

ベリアの戦争で亡くなって、それから……

と、正平と、それを支える寛至が『部屋』に入ってきて来る。唱文を唱え続け

る瑞穂に目をやり……

寛至 ……そら……
正平 そうか……先生がね……
寛至 まあ、信じるかどうかは君の勝手だが……
正平 ……
寛至 あたしやあ、何だかね……
正平 日向子。
日向子 ……はい。
日向子 ……はい。

と、日向子が寛至と正平の介添えを代わり……

正平 すまなかつたな、寛ちゃん。
寛至 あっ？
日向子 ……
正平 助かったよ……ありがとう。
寛至 ……いや。

と、日向子が正平を壇上に導こうとすると……

正平 ……いや、此処で良い。
日向子 はい。
寛至 そつちじゃなくて良いのかね？
正平 そこは……オユキサマの席だよ。
日向子 ……
正平 深雪が、来る……と云うんだろ。
瑞穂 ひふみよいむなや………来ました。
寛至 あっ？
瑞穂 来ましたよ。
寛至 ん!?!
瑞穂 深雪です……あっ？
日向子 ……何？
瑞穂 ……なあんだ、姉様まで来てしまったのね……
日向子 姉様って……？
瑞穂 フフフフフツ……
千種 雪代様です……
正平 !? お袋……？

と、壇上の袖の陰から、水面を滑るようにして現れる深雪、雪代……印形を組み、布留部の唱文を唱えながら。耳の奥で鳴る、『雪の声』が人々の頭を締め付けるかの如くに響いて……その気に押されるようにして、祠を見上げるようにして坐る氷室家の人々……

瑞穂 ……ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……
瑞穂・深雪・雪代 ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……

深雪 ……ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……
瑞穂・深雪・雪代 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……
雪代 ……ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……
瑞穂・深雪・雪代 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ……ひふみよいむな
やこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ!!

と、暁悦の三姉妹が祠を軸に放射状に坐し、唱文が止まると、耳の奥の声
が途切れ、静寂がその部屋を凍結させた。

九 オシラホロギ

と、突端に坐していた瑞穂が、空気よりも軽い何かであるように、立ち、
凍結した『部屋』の気を切り裂いて祠の前に進む……背中合わせの三角形
を壇上に作る三姉妹。
と、一様に押し黙った凍結を破り……

さて……何をどうすれば良いのかね？ オシラホロギでも始めるのかね？
それもいいが……居るの难道？

居ますよ。

居ますよ、雪代様が……

居ますよ。

居ますよ、深雪が……オユキサマが……

雪代・深雪・瑞穂 ……居ますよ。

日向子

……そうかい……

ん……？ ん……!? ん……!!

何ですか？

寛至 いやあ……頭の中でな……何やらわんわんと聞こえるのだ。何と云うか、声……のような
物なのだがね……

声ですよ。

あっ？

だから、『雪の声』ですよ。

……あっ!?

オユキサマの声がするんです。

……

それが聞こえるんです……そうなんだって、分かったんです……

……（と、不思議そうに自分を指さすが）

……そうか。つまり……居るんだね……？

……はい。

……

……あなた？

日向子

聞いて貰えるなら……母さんや、深雪に……オユキサマに聞いて貰えるなら、その方が良

正平

い。

寛至 おい、オユキサマって……（と、瑞穂を指さすが）

正平 寛ちゃん……

寛至 ……あつ……？

正平 頼みがある。日向子の事だが……日向子を……

日向子 ……

正平 ……やる。

日向子 !? ……

寛至 ……何と、云った？

正平 日向子をやる。欲しかったんだろ……

日向子 ……

寛至 ……

正平 自棄やけになんかなつちやいないよ、寛ちゃん。

正平 ……

正平 それが良いって、そう思ったんだよ。その方が、日向子は……

日向子 あなた……

正平 俺にはね、出来ないんだよ。こいつを幸せにしてやるなんてさ……だって、そうだろ？

日向子 こいつのさ、氷室に嫁いだからのこいつの人生って云ったらさ、跡取りの嫁なのに、『雪の

声』を聞けなくてさ、白い目で見られて……小雪と一緒にんだから、寛ちゃんにも解るだろ？

日向子 スペイン風邪で、肺炎になった、お袋……

正平 ……

雪代 俺や、親父や、耄碌もろくした祖父さんのさ……神経病の、深雪も……

正平 ……

深雪 そんな俺たちの看病で、世話で……それも、これも、みんな……

日向子 ……

寛至 ……

正平 ……だからさ、俺が日向子にしてやりたかった事が……してやれなかった事を……して欲

日向子 ……しいんだよ、お前に。お前だったら、出来るんだから……

寛至 正平……

正平 待て。ただ、条件がある。

寛至 ……

正平 日向子は、やる……確かにやるが、氷室とオシラサマは諦める。今の氷室には、山も、田

寛至 畑も工場も無い。家屋敷も売り払って、オシラサマの会堂だったこの建物しか無い……だが

日向子 ……此処は、オユキサマの場所だよ。『雪の声』を聞けて、オシラサマを呼べる、な……

寛至 ……

正平 女が居るべき処なんだ……だから……

日向子 ……そうかも知れんな……

寛至 ……

正平 だから……千種に此処を譲ってやりたい。瑞穂……先生にしばらくは預かって貰うという

日向子 ……事になるんだろうが……それと……

寛至 あつ……？

正平 日向子を……つまり、君の細君として迎えるのは、俺が逝ってしまった後の事にして貰い

日向子 ……たい。世間的な事もあるし、その方が、君にも、日向子にも良い事だと思う。どのみち……

寛至 ……そう長い事ではないんだ。それまでは、我慢して貰いたく思う。

正平 ……

寛至 承知してくれるか？

正平 ……

寛至 ……
正平 ……頼む。

と、正平、額を床に擦り付けるように礼。ややあって……

寛至 ……承知した……
正平 すまない……

と、微動だにしない正平と寛至。何かを……二人の人生に共有する想い出を反芻しているのだろう……

と、緊縛した間があつて、深い息が漏れたように……しかし、息の音を立てることなく……俯く、深雪、雪代……冷然として見ている千種……
と、小刻みに瑞穂の肩が震え出すと同時に……

日向子 フフフツ……

瑞穂 ……

日向子 フッフッフッフッフ……

千種 ……

寛至 ……

正平 ……

日向子 ……馬鹿みたい……

正平 ……日向子……？

日向子 馬鹿みたい。

深雪 馬鹿みたい。

雪代 馬鹿みたい。

瑞穂 馬鹿みたい……

日向子 ……ほんと、馬鹿みたいだわ……この、氷室で、最後に残っている、当主の好き勝手に出来るモノ、なんですね、私は……

正平 日向子……

来るモノ、なんですね、私は……

日向子 ……ねえ？

千種 ……それで、箱の中に飼われて、売り買いされたり、借金のカタで人手に渡るお蚕さんみたい

正平 ……そうですね……

寛至 ……

日向子 ……いや、正平は、あんたの為を思つて……

寛至 ……何ですか？

日向子 ……あつ……

日向子 ……為つて何ですか？

深雪 ……何ですか？

瑞穂 ……何ですか？

雪代 ……何ですか？

瑞穂 ……何ですか？

日向子 ……何ですか？

千種 ……

日向子 ……何ですか？

日向子 ……それは……

正平 ……それは……

正平
日向子

……
フッフッフツ……

瑞穂

フッフッフツ……

深雪

フッフッフツ……

雪代

フッフッフツ……

正平

……

寛至

日向子さん、あんた……？

日向子

そういう事ですから、寛至さん？

寛至

……はっ？

日向子

辞めてしまいましたから……諦めて下さい。やるとか、貰うとか、そういう馬鹿みたいな

お話は……私、此处を、氷室を出ます。いなくなりませす、此处から……

正平

ひ、日向子!?

日向子

大丈夫ですよ。連れて行ってあげますよ。あなたの独りくらい、私が何とでもしてあげま

すよ。でも……

正平

……

日向子

もう、ここに居たく無いんです。

寛至

……だって、どうするのかね？ 女のあんたが、独りで……

日向子

さあ……どうしましょう？ 先生みたいな生き方だってあったんだしね、千種ちゃんみた

いにだってね……やれるし、やれたんですよ、きつと。だのにね、この人をね、こんなね、

こんな風にしてしまったのはね、私無しでは生きていけない人にしてしまったのはね、私な

んです、きつと。私が淋しかったからなんですよ……ねっ？

千種

そうですね。

深雪

そうですね。

雪代

そうですね。

瑞穂

フッフッフツ……

日向子

フッフッフツ……

瑞穂

フッフッフツ……

深雪

フッフッフツ……

雪代

あっ……？ これって……？

日向子

聞こえたんですよ。

千種

……

日向子

……

正平

……ん？

寛至

……そうなんだあ……

日向子

ん!?

寛至

フッフッフツ……

日向子

フッフッフツ……

瑞穂

フッフッフツ……

深雪

フッフッフツ……

雪代

辞めるって、決めたばかりなのにね……馬鹿みたい……

日向子

馬鹿みたい。

雪代

馬鹿みたい。

深雪

馬鹿みたい。

瑞穂

ほんと……馬鹿みたい、だわ……

と、浮揚するように立ち上がって、瑞穂、振り向く。

拾 神の言の葉

と、瑞穂、オシラ堂の中を低徊するように進みながら……

瑞穂 どう、なさいますか？

……えっ？

正平 氷室の、オシラサマです。

……

瑞穂 オユキサマが……遊ばせてあげる人が居なければ、崇りますよ。崇る、と信じているのなら……

正平 ……

瑞穂 日向子さんに務めて頂きますか？ 聞こえるんですから、もう……

日向子 私は、この人の妻です。でも……氷室の嫁は辞めました。お受けできません。

瑞穂 そうですか……どうするの？

……

千種 ……

瑞穂 欲しいって人が居るんだから、それで良いんじゃないですか。

……

千種 良いですよ。あげますよ。要らないから。

……

雪代 あげますよ。

……

深雪 ……あげますよ。

と、瑞穂の視線の先に、寛至……

寛至 ……（と、「あたし、かね？」という体で自分を指さして）

……

瑞穂 しかし……

……

瑞穂 何ですか？

……

寛至 だって、そりや……

……

瑞穂 何ですか？

……

寛至 だからだね……

……

瑞穂 何ですか？

……

寛至 おかしいだろ、それは……

……

瑞穂 そうですか？

……

寛至 そうですよ！

……

瑞穂 そうですか？

……

瑞穂 そうだろが。おかしいよ。だって変だろ。『男』がオシラサマを祀るなんざ、変じやないか。違うかね！？ 変ですよ。

寛至

瑞穂

……

寛至

瑞穂

変ですよ。神様なんて、どれもこれも変ですよ。何処にも此処にも神様が居て、みんな勝手な事を云うんですよ。そんなね、勝手な事を云う神様のね、勝手な言の葉に振り回されてね……馬鹿馬鹿しいったらありやしないんです。だからね、思いつき変にやったら良いんです。良かったんですよ……ほんと、馬鹿みたい……

寛至

瑞穂

……

私はね、ずっと変だと思ってました。だって、誰も彼もがオシラサマで、オユキサマで御蚕様のこの村で、ウチばかりが提子様だったんだもの……母が逝ってね、二十二代目に引き取られて、オシラサマのお堂に、此処に入れてね……変じゃなくなっちゃって……私は変じゃなくなっちゃったんだわって、そう思ったのね……変なんです。貴方になら、お分かりですよ、金満さん？

寛至

瑞穂

あつ？

帝都に、オシラサマは居ないでしょう？ 誰も……誰もそんな物をありがたがっちゃいないもの……だから、やっぱり変なんです。みんな、他のお題目をね、他の阿呆陀羅經を唱えてるんです。

寛至

千種

瑞穂

瑞穂さん……

私、此処が、この家が……氷室がね、ゆっくりと腐って行くのが見たかったわ。私を、私達を……

深雪

雪代

瑞穂

家の軛で……

神様の軛で縛り付けた、この『家』が、ね……こんな『家』が絶えてしまえばね、『雪の声』が聞こえたって、そんな物はね……ほんのちよつと、他人よりも勘が良いとか、夜目が利くとか、走るのが速いとか……それっぽっちの物になるんだって思った。

千種

瑞穂

それでね、源一郎さんが、貴女を捜して欲しいって云った時にね……

千種

瑞穂

それは、面白いかなって思ったわ。氷室の血がね、まるで入っていない、貴女にね、名前

雪代

瑞穂

もね……

深雪

雪代

この館もね……

神様もね……そんな物やこんな物が、みんな、ね……みんな、貴女の物になったら、それも面白いかもって……そうしたら、貴女も、貴女にも聞こえるんだって判って……馬鹿らしくなっちゃった。

千種

瑞穂

……そうなんだ……

深雪

雪代

フッフッフッフッフ……

瑞穂

寛至

神様なんてね、祠の中身なんて、たかだかそれっぽっちの物なんだわ……そうでしょう、

寛至

瑞穂

はっ？

祠の中には、人の作った焼き物のお狐さんだの、木彫りの人形だの、そんな物しか入っちゃ居ないんです。御存知ですよ？ 奉安殿に……あれに入った御真影だの、教育勅語だの

も、たかだか、人が人を撮した写真と、人の考えた阿呆陀羅経だわ……

寛至 そんな、畏れ多くも……!

瑞穂 ですからね……神様って、つまりは人、なんですよ……

寛至 ……

正平 ……

瑞穂 ……見せてあげましょうか……

と、印形を組む三姉妹。雪代と深雪が布留部を……瑞穂はレビ記を唱えて……雪代と深雪、浮揚しながら祠に近付いて……
と、正平と寛至、身を乗り出すようにして……

深雪・雪代 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。

瑞穂 男または女の憑鬼者をなし、或いは卜巫をなす者は必ず誅されるべし。

深雪・雪代 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。

瑞穂 即ち石をもてこれらを撃つべし。

深雪・雪代 ひふみよいむなやこのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ!

瑞穂 彼らの血は彼らに帰せん。我、汝らの神エホバなり!

と、深雪と雪代の手が掛かって……開かれる、祠の扉……そこには、氷室家第二十二代当主、氷室暁悦の首が在している。

と、目を瞑っていた暁悦が、ゆっくりと目を開き、不気味な程のさわやかさで、声を出さずに笑う。

と、驚愕する正平と寛至……まるで予想したかのように見ている千種と日

向子……

と、嬉しそうに『教育勅語』を暗唱する暁悦の、首……

暁悦

朕惟フニ我カ皇祖皇宋國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ……爾臣民常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ……

瑞穂

……やつぱり、阿呆陀羅経、だわ……

暁悦

是ノ如キハ獨リ朕力忠 良ノ臣民タルノミナラス斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宋ノ遺訓ニシテ……

瑞穂

……馬鹿みたい……

と、深雪と雪代が祠の扉を閉め、教育勅語は尻切れトンボに終わる。間の抜けた沈黙が漂って……

瑞穂

こんな阿呆陀羅経を信じて、崇りを怖がったりするなんてね……ほんと、馬鹿馬鹿しかったらありやしない……

と、日向子、浮揚するように立ち上がって……

正平

……日向子!?

日向子

もう行きますよ。

正平

えっ……?

日向子

見たかった物は見られたでしょう?

正平 ……
日向子 行きますから。此処にね、此処に居続けますとね……繭から出ても、翔べない翼しか生えていない、お蚕さんみたいになりますからね……

正平 ……
日向子 来るんですか？

正平 ……
日向子 どうなさいますか？

正平 ……
日向子 自分で決めて下さい……

寛至 ……ヒナコ。

日向子 ……

寛至 ……私と居たら、こんな風になりますよ。

正平 ……

寛至 ……

日向子 ……それで……それで良いならね、声をかけて下さいな。きっと、何処かに立っているから……

寛至 ……

日向子 さようなら。

寛至 あっ……

千種 いいですね……

日向子 何？

千種 翔べたら良いですね……

日向子 ……ほんと……

瑞穂 ……ほんとに……

千種 ……
瑞穂・日向子・深雪・雪代 翔べたらいいわ……

と、日向子、水面を滑るように歩んで……見送る姉妹達に振り返って……

日向子 ……じゃあね……

と、日向子、正平を一瞥して『部屋』を出て行く。正平、寛至としばし見つめ合い、日向子を追って……

正平 ……ヒツ、ひな、日向子……！

寛至 ……

と、正平、日向子を追って去る。

寛至 お、おい……

瑞穂 ……

千種 ……

寛至 ……行くって、何処へ行くんだね？ だって、雪なんじゃないのかね？

千種 大丈夫ですよ。

寛至 あっ!?
千種 行けますよ。
寛至 何で……?
千種 だって溶けたから、行けますよ。
寛至 溶けたって……
千種 ……
瑞穂 七七日を過ぎたから、雪も、溶けます。
寛至 ……はっ?
瑞穂 ……フッフッフッフッフッフ……
寛至 七七日って、四十九……ああっ!!
千種 何ですか?
寛至 ダ、ダービー! ダービーが! わあっ! ダービー! 第一回東京優駿競走会……!!
うわぁーっ!!

と、寛至、馬の駆け去るように……

千種 ……

苦笑するような三姉妹……

吠

翼

と、寒々とした『部屋』に、千種と三姉妹だけが残り……

瑞穂 だあれも居なくなっちゃった……
千種 はい?

瑞穂 この『家』よ……氷室の、『家』。

千種 ……
瑞穂 ……

千種 行きましょうよ。

瑞穂 えっ?

千種 何処でも良いですよ。

瑞穂 ……

千種 ……だから、行きましよ、瑞穂さん。

瑞穂 どうするの、千種は?

千種 どうしようかな……

瑞穂 ……

千種 でも、此処には、家族は居ないんだって判ったから……

瑞穂 家族……

千種 はい。『家』ってね、建物だったり、血筋だったり、名前だったりするでしょう? でも、

瑞穂 私が欲しかったのって、そんなんじや無かったんだって、分かったから。

瑞穂 ……そうなんだ。

千種 だからね、探します、これから……居なければ作りますよ。
瑞穂 凄いのね。

千種 そうですか？

瑞穂 凄いわよ。

千種 ……そうですね。

瑞穂 ……良いのかな……出て行っても、良いのかな……

深雪 構わないわよ。

雪代 お行きなさいな。

深雪 行ったら良いんだわ、何処へだつて……

瑞穂 ……そう？

深雪・瑞穂 羨ましかったわ、貴女が……

瑞穂 『家』の娘の貴女が……

深雪 『家』の娘、では無い貴女が……

瑞穂・深雪 貴女が……羨ましかったわ。

深雪 でもね、そんな物はね、もう……

瑞穂・深雪 馬鹿みたい……

深雪 ……な、モノだもの。だから、ね……返してあげる。貴女を……

瑞穂 ……

深雪 母様、手伝って……

雪代 ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。

深雪 ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。

と、瑞穂に憑依していた、オユキサマの振り袖が、雪代と深雪の手によって取り払われて……

雪代・深雪

ひふみよいむなやここのたり、ふるべ、ゆらゆらとふるべ。あはりや、あそばすとまうさぬ、おしらのおおかみ、もとつみくらに、かえりませ。もとつみくらに、かえりませませ。

深雪 オシラの大神……

深雪・雪代 帰り在せ……

雪代 氷室の大神……

深雪・雪代 帰り在せ……

深雪 提宇子の大神……

深雪・雪代 帰り在せ……

雪代 エホバの大神……

深雪・雪代 帰り在せ……現津大御神、帰り在せ。元津御蔵に帰り在せ。

深雪 帰り在せ……

雪代 帰り在せ……

深雪 帰り在せ……

雪代 帰り在せ……

と、祠はその振り袖によって封印されたように……

深雪と雪代、水面を滑るように、祠の両端へと消えた……

瑞穂 ……あつ……

千種 ……何ですか？
瑞穂 居なくなっただわ……
千種 ……
瑞穂 ……いい気持ち……

と、長い吐息を吐く、瑞穂。

千種 ……行きましようか。
瑞穂 ……

と、瑞穂と千種、彼方を見て……

瑞穂 行って何をするの？
千種 はい？
瑞穂 千種は。
千種 馬鹿みたい……
瑞穂 ……
千種 ……じゃない男に会いたい。
瑞穂 ……大変よ。
千種 知ってます。
瑞穂 そうなんだ。
千種 瑞穂さんは？
瑞穂 翼を、探そうかな……
千種 ……天使の翼？
瑞穂 まさか……神様のお守りなんて、もう、うんざり……
千種 ……そうですね。
瑞穂 フフン。

と、『彼方』を指す、瑞穂と千種。

と、いつしか、千種の姿は、瑞穂の傍らから消え……

孤独と引き替えに得たものに向かって、歩き続けて行く、瑞穂……

遙か遠くから、それを見守る、生まれずに逝った魂が、光の翼を拡げて飛び立とうと……

終劇

【オシラサマ】

人間の娘と馬の異類婚譚を謂われとする、男女、もしくは馬と娘二体で一対をなす神で、家内安全や養蚕の神とされる。御神体は男女や馬を彫刻した棒状の木に、オセンダクと呼ばれる布を貫頭形に被せたものが多い。柳田国男の『遠野物語』で有名だが、広く東北地方に分布し、祀り手は主婦やイタコなどの女性。この神を祀る家は富貴自在と言われるが、祭祀を怠ると氏子に祟るとも言われる。作品中に現れる「オシラサマ」は、作者である紅王が、複数の伝承や資料から創作したもので、特定のモデルは存在しない。

【オシラホロギ】

一般的には「オシラ遊ばせ」と呼ばれ、命日や縁日と呼ばれる日に、祭祀者である女性が、神棚や祠からオシラサマの像を出し、祭文を唱えながら上下左右に振る。祭文は主として、オシラサマの謂われを語る。

映画『遠野物語』では祭文に加えて不動明王の真言が唱えられていたが、作中で唱えられるのは「ひふみ」あるいは「布留部」と呼ばれる古神道の祝詞。

【オユキサマ】

本作品のみの完全な造語。

オシラサマに仕える巫女で、これを祀る氷室家の当主の妻、或いは娘が務める。未婚、既婚を問わず白無垢に前帯を結び、振り袖を羽織っている。その装束の謂われは、神の嫁であるオユキサマは…云々、というのが作者の弁。だが、単に紅王の趣味である事は誰でも知っている。

【雪の声】

代々、氷室家でオユキサマを務めた女性達は、降雪の予感がある種の音として知覚する、特別の才能を有していたとされ、氷室家でオユキサマを務める為の絶対条件。

当然、これも本作のみの創作だが、いわゆる靈感と呼ばれる能力は、側頭葉や松下体が、地磁気や気圧変化などを知覚する事と関係が深いというのが最近の研究成果。

【暗黒の木曜日】

一九二九（昭和四）年、十月二十四日、ニューヨークで起こった株価大暴落の日。米国の関税政策によって世界恐慌に発展。対米輸出に依存していた日本経済は大打撃を受け、生糸の輸出額も激減した。その後の凶作や不況に対する政府の無策が、軍部の台頭を許すきっかけとなる……って、何だか今と似てたりして…

【スペイン風邪】

第一次大戦当時、スペインから始まった感染力と死亡率の高いインフルエンザ。日本では一九一八（大正七）年から翌年にかけて大流行し、十五万人もの死者を出した。ライノ・ウイルスによる一般的な風邪と流行性感冒は全く別の病気だが、インフルエンザ・ウイルスが発見されたのは、この物語の翌年にあたる一九三三（昭和八）年。

【奉安殿】

帝國憲法下、教育勅語等を収め、全国津々浦々の小学校に設置された祠。その前を通る時は、最敬礼しなければならなかった……これも国旗国歌法と似てたりして…

【隠れ切支丹】

キリスト教の信仰が禁止された幕藩体制下で、秘密裏に信仰されたキリスト教。土着宗教などと混合して、本来のキリスト教とはだいぶ異なるが、現代でも、僅かながら、この信仰を守る人々は存在する。ちなみにデウス様は、父なる神、サンタマルヤは聖母マリアの事。

紅王国では、物語を転がす要素として、旗揚げ作品『化蝶譚』から度々用いられる、紅王のお気に入り。

【レビ記】

旧約聖書のうち、律法と呼ばれる部分の一書。信仰に関わる規定から、民法や刑法に相当する事、病気や食事、性生活など、様々な決まり事が具体的に書かれている。

【第一回東京優駿競争会】

一九三二（昭和七）年、四月二十四日、目黒競馬場で開催された、日本初のダービー。二四〇〇メートルで、優勝馬の名はワカタカ……なんだかなあ……

作成／在倉恭子